

公益社団法人 関西吟詩文化協会
双仟吟詠会

そうせん

第49号

令和7年2月発行

発行責任者 宮崎 訓胤
編集責任者 竹谷 訓鳳

基本理念

信頼と友愛に基づく個の尊重
運営の公正と明朗化
役職の自覚とその進行

努力目標

会員50名突破
綿密な企画と運営に
基づく活性化
理解と協力に基づく
意欲的な行事参加

人生の節々其の三「社会人時代 のエピソード数々その二」

会主 村田訓洲

全国に販売代理店設定

阪大教授から開発依頼を受けた商品、性能良好で関西中心に販売が進んで来たので全国総合病院で中央検査部のあるところを中心に販売することにした。

まず試薬販売店を主に都道府県一販売代理店制度に、大阪道修町にある和光純薬、片山化学等の全国販売店組織を参考に、武田薬品系列の和光純薬、既に取りのある片山化学へ訪問、全国販売組織網を開示していただいた。

販売進行次第で東京、福岡に営業所を設置することにした。

先ず阪大教授、東京国立第一病院(現東京国立総合病院)の先生から紹介状を頂いての訪問、検査部長等の先生方は丁寧に面談していただきながらも販売は順調に進まなかった。

それで私の義理の兄弟で大手製薬会社の営業を担当した方に、何故販売が順調に進まないのか教えてほしいと訪問した。その答えは一・学閥、二・地域性を考える様教示された。

四国地区販売

四国四県は各々学閥が異なり地域性がはっきりしている。

徳島県・大阪大学、関西地域 香川県・岡山大学、岡山地域 愛媛県・広島大学、広島地域 高知県・東京大学、関東地域

この様に大学の系列性が強く、その中でも高知県は四国山脈に囲まれ情報が遅くなるとの考えで

最先端情報の入る関東各大学、薬品会社の方向性を持つている。

この様に四国地区の攻略はこれを基本に戦略を取るよう教えてもらった。

その一例として高知県で東京の医学部教授を招いての医学学会が開催されることになり当社と東京本社のある医薬品会社にスポンサー依頼があり、関西の医学部には依頼しない様であると。その後これを参考に戦略を練り順調に拡大出来た。

九州地区販売

九州全地区は四国四県の様な地域性は無く関西、関東大学の先生何れからも容易に受け入れていた。試薬販売については大阪道修町との取引が中心であった。割合順調に全県設定することが出来た。但し沖縄は米軍統治地区で海外出張、輸出であった。

名古屋・中部地区販売

名古屋・中部地区は日本の中心(臍)であるとの意識が強く、トヨタ、スズケン(医薬総合販売会社日本一)がその一例、常に関東方向性で関西をやや劣視する傾向が見られた。阪大教授の紹介で訪問、丁寧に進まなかった。

義兄弟の医薬販売責任者の言葉として、関西の教授では無く関東の大学教授の紹介で訪問するように進言され実行したところ即順調に販売促進出来た。

北海道地区販売

北海道地区はほとんど関東からの仕入れが中心、更に北海道は本島とは遠く運賃等の加算で北海道価格として定価に十パーセントを加算して販売していた。当社は全国同一価格制を取っていたのでそれなりに貢献出来たと思う。北海道の人は言葉尻に何度も「本島の人」と今も脳裏に残っている。

北海道の営業は九州沖縄全域を抱えた位の地域で二泊三日以上の営業が常、更に冬季営業は困難で北海道価格は当然と責任者は豪語していた。

何度も北海道の代理店へ同行販売を行ったが範囲が広いので毎日営業担当者が交代、毎日同じ説明を繰り返す数日の訪問でとうとうダウンしてしまつた。但し広々とした広大な農地、延々と続く玉蜀黍畑、アスパラガス農場、自衛隊射撃訓練場がスズランの開花時期のみ道民に開放、北大の羊ヶ丘見学、美味しい食べ物、広大な北大、時計台前のホテル宿泊等楽しい思い出が沢山ある。

北海道営業を終え東北地区販売へ進んだが一日ホテルで休養した覚えがある。

東北地区販売

東北六県何れも関東方向、仕入れ先も関東、大企業、業者の方何れも物静かな方ばかり、但し大変親切、例えば大学や試薬販売店への行き先を訪ねると何と同行案内してくれ恐縮した思い出がある。反面ホテルに入ると必要以上の会話はなく私からの一方会話となり話が続かなかつた。

その後全国に代理店制度が完了、山梨県を除いて全国へ出張した。一泊以上の出張時、必ず実行した事は営業後または夜間に必ず広く町歩きする事と名物と言われる食事をする事に努めた。それは病院担当者、代理店の人々と親密な会話が出来るネタ探しである。良く言われるように「名物に旨いもの無し」とはいえ高知県では鯨の舌、熊本では馬刺、鹿児島ではオコゼのフライ、岡山、長野では果物、北海道では牛乳、玉蜀黍他沢山あった。

全国出張は苦しいこと多いながらも多くの人、情報、ご馳走と楽しかった思い出が沢山あり未だに脳裏に残っている。

転落事故を目前にして

会長 宮崎訓胤

大阪からの帰宅時、乗り換えの為階段を降りていた時、私の前の高齢者が突然足を滑らせ滑落。その前にいた若い女性の肩につかまり転落し、女性は高齢者の下敷きになり、二人共動かなくなつたため救急車が出動し大騒ぎとなつた。

この事故のことは今も頭から離れない。

何時どこでこの様な事故に巻き込まれるか解らない。幼児や若者の場合は比較的軽いけがで済むことが多いが、高齢者になると怪我の程度が重くなる傾向にあり、なかには頭を強打し死に至るケースや怪我が原因で一介護が必要になるケースもある。事故の背後には「焦りの心理」がある。焦りや気の緩みが転倒につながる故一歩一歩確認しゆっくり行動に移すことが大切である。私もウォーキングや太極拳で足腰を鍛えているつもりだが、薬の副作用もあるのかよく転びそうになるので次のことを心がけるようにしている。

- ・滑りにくい溝がある靴を履く。
 - ・重心は 少し前寄り、靴裏全体のちょうど真ん中あたりにおく。
 - ・歩幅は狭くして足裏全体で着地する。(体には歩幅を広くとるのが良いのだが)
 - ・転倒しても大事に至らないような食生活
 - ・下半身の筋肉を維持するような体操。
 - ・転倒リスクを軽減できるような生活環境。
- 又、エスカレーター事故も同様です。充分注意を払ってお出かけください。
- 会員の皆様いつ迄も元気で頑張りましょう！

人生思い出の「コマ」

白さぎチャリティ吟詠会に参加して

水無月支部 竹谷訓胤

平成十七年三月、白鷺連合会よりチャリティI吟詠会への出場者認定書を頂きました。その後白鷺連合会の先生から色々連絡の手紙等を頂きながら平成十八年九月二十四日初めてのリハーサルが行われました。私の出場する舞台のテーマは

「故郷恋い人恋い」というテーマで夢、出会い、日本人の心の原点を綴った構成舞台となっていました。私達のメンバーは八名で浜松一名、大阪西淀川四名、名古屋二名と私、奈良一名でした。

吉田松陰の「斯くすれば」の和歌と「戦後述懐」の吟、宗良親王の「君のため」の和歌の組み合わせでした。私はこの吟と和歌を覚えるため中谷漱苑先生が吟じておられる範吟テープで、何度も、何度も聞き、覚えるべく練習しました。九月二十四日のリハーサル、十月二十八日のリハーサルでは中谷先生から直接指導を受け吟の速さ、音階等の指摘等を受けた為、八名のメンバーは、何度も、何度も練習をしました。二十八日の練習が終わってからも本番前の最後の練習を済ませて、

愈々、本番当日がやってまいりました。羽織、袴に衣装替えして八人メンバーは再度の練習をして「よし!!これで良いと思う」と心一つにして夢の舞台に入りました。やはり緊張が高まって来るのが自身で感じ取っていました。

舞台スタッフの方が私たちの出番が近づいてくると名前を確認しながら出場のタイミングを伺って合図をしてくれましたのでマイクを握って舞台に立ち「戦後述懐」吟じました。

十八年前の体験を今、静かに思い出しています。

早春賦によせて

光輝支部 宮崎訓胤

ラジオから流れてきた軽快な明るいメロディーの「早春賦」

長野県松本へ主人との旅が鮮明に甦る。「弓穂高駅前」のレンタサイクル店で自転車借り一・五キロの一本道を走り続けると大王ワサビ園に到着する。流石日本一のワサビ園、一面に広がるワサビ田の鮮やかな緑色がとても綺麗だった。橋から見下ろす小川の透명한流れも素晴らしい。

サイクル店の店主が回り道になるが是非とも早春賦の歌碑を見てくるとよいと教えてくれたので来た道を戻り平坦な土手を、川のせせらぎや鳥の鳴き声を聞きながら木漏れ日の中をのんびり走ると、この上もない心地よさを感じる。木々の間から北アルプスを眺めながら走っていると穂高川の堤防沿いに歌碑が見えてきた。あの「早春賦」に歌われた風景が目の前に広がり、ここで読まれた詩なのだと思わずさむ。

春は名のみの 風の寒さや
谷の鶯 歌は思えど

時にあらずと 声も立てず
時にあらずと 声も立てず

氷解け去り 葦は角ぐむ
さては時ぞと 思うあやにく

今日もきのうも 雪の空
今日もきのうも 雪の空

今日もきのうも 雪の空

春と聞かねば 知らでありしを
聞けばせかるる 胸の思いを
いかにせよとの この頃か
いかにせよとの この頃か

北アルプスの麓にある大町は冬の期間が長く
寒い日が続く。三月ごろになると暖かい陽が差し
始めて氷が解け、ようやく春の気配を感じるよう
になる。

まだかまだかと春を待ち遠しく思う不安な気持
ちの中にも心の奥に秘めた力強さを感じさせてく
れる名曲です。

あれから早や二十数年、今でもあの時の素晴ら
しい景色が忘れられない。しかし、もう一度訪れ
る気力はない。体力のこともあるけれど、観光客
で賑わい、あの日のように静かに心いくまで楽し
むことができないだろうから。

故中野鷺訓師の思い出

水無月支部 玉置訓舟

最近、詩吟の稽古の折に竹谷訓鳳さん達等が故
中野鷺訓師のことをよく話されるので、私も懐
かしい思いがいっぱいわいてきます。

古い日記などを探し見ていたら、そこには故土
井鷺行先生が亡くなられてから、双仟誕生の前
後が記録されていました。

そして、その中に中野先生の悩み、苦しみなども
見え隠れしています。

故中野先生には平成七年（一九九五）から月一
回漢詩の作り方を習いました。又、手紙のやり取
りで作詩を批評していただきました。

拙い私の作詩を通して、今一度「双仟誕生」前
後の一部に触れたいと思います。

★平成十三年正月 先生に出した賀状

迎春書懷

玉置行雲

雖千萬敵意何窮

千万の敵といえども心何ぞ窮

起立原存正義中

起立する所も正義の中にあり

空秘剛腸迎旭日

空しく剛腸を秘し旭日をむ

咆天任爾苦辛風

天に咆えさもあらばあれ苦
辛の風

★先生から

新春にあたり立派な詩、嬉しく拝見。貴殿の気
持ち、否決意がひしひしと感じられて痛快の
極みです。・・略・・一縷の望み無きにしも非
ずですがとにかく今月一杯成り行きを見る要が
あります。

★平成十三年五月十日

贈鷺訓師 書懷

玉置行雲

耐艱荆棘滿花堆

耐艱荆棘滿花堆づたかし

辛苦忍冬香遍来

辛苦忍冬香りあまねく来る

今夕双仟吞一椀

今夕双仟吞む一椀

高吟笑語我心開

高吟笑語我が心を開く

★先生へ、私の気持ちは棘Ⅱイバラをもめてい
る問題とし、忍冬Ⅱスイカズラを先生に見立
てて作詩しました。
★先生から

・・略・・貴殿の後半二句に「双仟」となっ
て嬉しい心を表わし、結構。私も使いたいの
ですが対外的に配慮して中野グループとして
いるので、「双仟」を「吟朋」としてほし
い。

尚、未筆ながら貴殿の新雅号「訓舟」で決定し
ます。「行雲」の吟号は土井鷺行先生から頂い
たものです。

お米作りの日本史

天理西支部

仲西洲西

稲の栽培は、原始時代に野生の稲の種子をまい
て収穫したのが始まりと言われています。「日本
のお米」であるジャポニカ米の栽培は、中国大陸
の長江の中・下流域で始まったとされています。
稲作技術の伝播には、諸説がありますが、日本に
上陸した稲作は、各地に広がり定着していきま
す。弥生時代中頃には、東北地方の北部まで稲作が広
がっていたと思われま

静岡県登呂遺跡の弥生水田は、矢板や杭で補
強した畦(あぜ)できちんと区分され、用水路や堰
(せき)も整備されていました。12戸の竪穴式住
居跡と、約7万㎡の田、2つの高床式倉庫跡が発
見されています。

弥生時代の農具のほとんどは、カシ材を加工し
た木製品です。木鋤(きくわ)・木鋤(きすき)など
を使って田を耕し、干し草などの肥料は田下駄
(たげた)や大足(おおあし)によって田んぼに踏み
込まれました。粃(もみ)は田んぼに直にまかれ、
稲が実ると石包丁で穂先だけ刈り取りました。脱
穀(たっこく)には、木臼(うす)と堅杵(たてぎね)など
が使われ、穀物は貯蔵穴や高床式倉庫に保管されま
した。

古墳時代には、水路の整備が行われ、広範囲で田んぼが作られ生産力が上がり、食糧が安定して供給されるようになると、社会が発達して各地に豪族が生まれました。水田に牛の足跡が残っていることから、家畜を利用した農作業が始まり、それにもなつて馬鋤(まぐわ・マンガ)や中国の華北地方の犁(すき)カラスキ、長床犁も伝えられたようです。また、九州北部を中心に鉄製の穂摘具(ほづみぐ)や鉄鎌もあつたようです。また、農具は、田の耕作が目的のシンプルなものほとんどでしたが、穂を刈るのではなく、現在のように根つこの部分を刈るやり方が一般的となり、鉄製の鎌が普及していきます。

奈良時代には田植えが本格化します。人々は手強い雑草であるヒエと戦いを続けるうちに、水田の雑草を抜いてから、別の場所で大きく育てた稲を植える方法を編み出しました。次のヒエが芽を出したときには稲は大きくなつており、倒伏(とうふく)も少なくなります。また、農地を広げるために稲栽培に向かない寒い土地にも、稲作を広げるため、結果的には寒さに強い品種が開発されました。田んぼの面積は、現在の3分の1である100万ヘクタールに達していたようです。

平安時代、墾田永世私財法を受けて貴族や寺社が開墾した荘園は増え続け、農民は農業をしながら武士となり、軍事を養っていきました。

鎌倉時代ではお米の生産高も大きく伸びました。領主が税(米)を早く手に入れるため、早米を作らせたり記録もあります。農家は、牛や馬を利用して土地を耕すようになりました。水田に水を引く水車が使われ、金属製の鎌(かま)、鋤(くわ)、鋤(すき)などを作る鍛冶も生まれ、案山子(かかし)もこの頃に登場します。

室町時代の末期には治水と新田開発により、日本中の川は作り変えられ、不毛の土地を緑の沃野(よくや)に変えていきました。田植えの合間に笛や鉦(かね)、太鼓にあわせて踊り、歌う田楽(でんがく)が広く社会に浸透していきました。

安土桃山時代には豊臣秀吉の太閤検地によって全国土地、収穫量、年貢量などを定めて記録し、土地台帳に農民の名を記しました。

江戸時代、お米は年貢として納められ、大名はこれを大坂や江戸で売って収入としました。大名がもつ領地の広さは石高(くだけか)で表され、1石は約180リットル(約150kg)で、当時一人が1年間に食べるお米の量にあたります。

この時代、稲の品種改良が進みました。民間の篤農家(とくのうか)が、たまたま冷害のときなどに田んぼで元気に育っている数少ない稲を取り上げて、何年間も繰り返し栽培していったのです。新品種はお米の収穫量を増大させました。扱竹(こきたけ)と様々な農機具も開発されました。扱竹(こきたけ)という、竹の道具に替わって千歯扱き(せんばこき)が発明され、作業効率を10倍以上も高め、全国に普及していきました。また、耕作のための備中鋤(びちゅうぐわ)、お米を選別する唐箕(とうみ)・千石どおし、田畑に水を引くための龍骨車(りゅうこつしゃ)、足で踏んで水車を動かす踏車(とうししゃ)などが発明されました。

さらに、肥料も変化していきました。江戸、大坂、京という大都市周辺の近郊農業が盛んになりました。農民たちは農産物を都市にもって行き、糞尿を持ち帰って肥料にし、リサイクルしていきました。他にも油かす、汚水、緑肥、堆肥、泥肥、魚のあらなどが使用され、とくに干し鰯は動物性の肥料として抜群の効果をもたらしました。しかし、災害や害虫に対する知識は不足しており、虫送りや鳥追い、風祭り、雨乞い(あまごい)という行事で無事を祈るしか方法はありませんでした。そのため災害による凶作の年も多く、江戸時代には150回ほどの飢饉(ききん)がありました。

明治の世になると新政府は、農業技術や農学を学ぶ目的で学者や技術者を欧米に派遣し、欧米の技術者を日本に招きました。

稲の育種については、大正年間の純系淘汰優れたものを選抜して残していく)によって収穫量は5〜10%増加しました。更に中期からは交雑品種(かけあわせ)による育種が試みられました。

化学薬品を使った最初の除草は、明治時代の中頃、欧米で銅の化合物に除草効果が発見されると、日本にも伝わり、田んぼで使用されました。

同じ頃に雑草取りの田車という農機具が発明されました。先端に幅30cmぐらいの、小さな水車のような回転する筒がつけられていました。それを使うため、稲は幅30cmの間隔で平行に植える正条植えが日本中に普及しました。

大正の頃から、人力で動いていた農業機械が電気や石油を使った動力で動かされるようになっていきます。田んぼの水の揚水と排水をはじめ、脱穀作業、粃すり作業、精米作業、製粉作業、藁の加工作業など次々と機械化されていきました。

1933年(昭和8年)頃、動力によって田んぼを耕す動力耕うん機が実用化されましたが、太平洋戦争により石油資源が極端に不足したため、普及しませんでした。

1955年(昭和30年)以降は、工業の発展にともない、農業水利の改良、ほ場整備事業が進みます。新しい栽培技術も展開されたことよって、お米の収量水準は向上しました。機械化の普及と相まって、水田経営は規模拡大の方向に見直されるようになります。

農業の機械化のなかでも、田植機は明治時代から多くの人々が研究をしてきました。しかし、どの田植機も長さが30cmほどの大きな苗、成苗を使っていたため、うまくいきませんでした。しかし、1965年(昭和40年)前後に、10cm程の苗、稚苗(ちびょう)を植える田植機が登場し大成功をおさめ、一気に普及します。農家の何百年にわたる悲願が達成されたのです。

また、除草剤の使用も一般的となりました。アメリカで開発された2・4-Dという除草剤が瞬く間

